

はなしの自由席

作品「長靴」と現物の 長靴

秋山清断片

寺島 珠雄

九月二十九日、和歌山市でひらかれる「田本繁全集」完結の出版記念会に出る秋山清さんを新大阪駅に迎え、近藤計三と私と三人になつて南海電車で和歌山へ行った。

京都、神戸、奈良と並んで大阪から言えば和歌山も同じく隣り合った都市だが、電車と行程は一番長く、風景の変化もあつて、旅という気分にはせられる。電車のなかで秋山さんと詩の話をしたについては、幾分かそんなことの作用があつたようだ。

いろいろに飛んだ話の一つに、九月一日、秋山さんの八十歳の会で渡された『秋山清自選詩集』に入っている作品「長靴」のことがある。

ゴムの深い長靴をほしいと思う

広場を
公園を
人ごみを
大手をふつて歩いてやろう

労働者、農民
みんなの力づよい足どりで
世界をふみたくれ
ふみたくれ

ぼくは、その丈夫なゴム靴をはいて
駆けて
雨あがりの空を祝福してやろう
以上が初出では次のようになってる。
来月は何としても
深いゴム靴を買ほう
丈夫な深いゴム靴を穿いて
東京の街を
電車の中を
広場を
公園を
人混を
大手を振つて歩いてやろう
銀座通りを
日本橋の上を

四円五十銭も出せば買えよう

こう書き起されている作品を最初に読んだのがいつで、何に載つた時だったか、私の記憶は曖昧だが、こんどの自選詩集のなかで親しい感じにさせられるものだとは私は言つた。

そして、しかし四円五十銭とはずいぶん高いがそんなにしましたかと尋ねた。半値ぐらいいたとすんなりうなづけると思つていたのである。それに対して秋山さんは、いやあは正確なところさという意味を答えた。

田本さんの会のあと、秋山さんは大阪へ戻つて泊り、翌日は小野十三郎さんのお宅で少しばかりテープに収める対話もしてから、高島洋さんにも会つて帰つたのだが、私の方には長靴の値段のことがまだすっかりは消えない疑問として残つていた。

で、とりあえずに、アテにならぬ部分もありと承知の『値段の明治大正昭和風俗史』の長靴の項を探した。単行本も出ているが、私が探したのは連載していた『週刊朝日』の切抜きである。

「大正十三年四月 大正十四年五月五十銭
昭和元年五月 昭和二年四月五十銭」
値段の推移表の冒頭にこうあつた。
作品「長靴」の初出は昭和三年——一九二八

年六月の雑誌「單騎」創刊号だから、やはり秋山さんは正確だったのかとおよそは納得の気分になった。

ところが、そんなこだわりから初出の「單騎」の「長靴」も読んでみると、値段とは関係のない別の部分で、秋山さんが発表後に加筆やら削除やらを相当たくさん行い形をととのえているのがわかつてきた。作品全体の味わいにはほとんどひびいてこない部分のこのだが、おもしろいのでそのメモも提出しておく。ただし、かなづかいや漢字の変異はふくんでいない。まず自選詩集から。

彼らの掃き清めた玄関先を

ぬかるみのように闊歩してやろう
これらの掃き清めた玄関先を

ぬかるみの
彼等の掃き清めた玄関先を

大道のやうに闊歩してやろう

つづいてはしまいまで全部を見る。自選詩集が先であるのは前と同じだ。

来月はなんとしても

深いゴム靴を買おう

丈夫で深いゴム靴をはいて

東京の街を

ブラットホームを

書かれてからは二年後、雑誌「弾道」において、局清あるいは高山慶太郎を名乗つた秋山さんが、当時アナキズムに同調と見られていた農民詩人に対して批判を行ったことは想起していいだろうと思つてゐる。

批判を行なうよりほば二年前の農民詩の状態でどうであつたかを見ないで言うのだからヤマカン的だが、まあこの文章の性質からはそれも許されると思う。また付け加えるならば、秋山作品「長靴」が初出した「單騎」のちに合同した雑誌「矛盾」では、すでに農民と労働者が利害を異にするか否かの論があつたことも考えるべきなのだろう。

ともかく、一つの問題として「労働者 農民——プロレタリア」から一度は「農民——プロレタリア」が消されたことが（公表に至つていなかったとしても）私には残る。

そしてすでに見てきたように、自選詩集や先行した現代思潮社版「秋山清詩集」では、かつて消された（消されかけた）二語のうち「農民」は旧に復しているのである。やはりちよつとしたポイントではあるようだ。

あと、「オレ」を「ぼく」に改めて初出形では次の行だったところを下に吸収しているのが目立つが、この場合でも自筆書きこみで

は、なぜか「その丈夫なゴムの長靴」とされ、しかしそれは表に出るに至らず現在の形におさまっている。

ところで作品「長靴」から現物の長靴に、話を転換する。

本誌第四四号に私は「満月」という作品を提出した。一九八四年二月十七日、東京に大雪が降り、新宿でもたいへんだったが、西武電車を降りてから秋山家までが一層にたいへんで、秋山さんと私が「雪の進軍」をしたことなどがそれには書いてあり、用心よく長靴ばきの秋山さんが先に立って歩いたことも落してはいない。翌朝には隣りの向坂逸郎邸の角まで私は雪掻きをしたのだが、南海電車のなかでしゃべっているうちに、ふと思いついて秋山さんに言ってみた。

あの晩、はいていた長靴はもしかすると詩に書いてあるあの長靴では？

——そうだよ、よく保つやつでねえ

あっさりと答えられてかえって二の句をつげぬていたらくだったが、まさか嘘ではないだろうから、かぞえれば五十数年、やはり四円五十銭は高くなかったわけか。作品がいまもみずみずしいのに不思議はないが、現物の長靴が実用に耐えているとは。この方は不思議

議と言つて失礼にはなるまい。

さらに余談。

たしか金子光晴さんだったと思うが、秋山さんにアダ名をつけて「ゴムさん」と呼んだとどこかに書いていた。どこかというのを確認する余裕がないから連想の自動記述にすぎないが。

84・11・1

遙かなる原景

申 有人

最近岩波文庫から「朝鮮短篇小説選」として上下二巻が出版されたことは、今春NHKのハングル講座「アンヨンハシムニカ」の開設と併せて「遠い国」の原景に一步近づく努力の収穫ではなかったか。

三人の日本人朝鮮文学者（大村益夫、長璋吉、三枝寿勝）の共同編訳で、日本の植民地時代三十六年を背景とする十九人の朝鮮人作家とその二十二の短篇を選んでいる。

朝鮮の開国は隣国日本に一步遅れて一八七六年、鎖国政策を解き開港はするがその基礎的条件を備えていなかったため、一九一〇年、

文学の目覚め期の作家及びその作品としては、同人誌（創造）、（廢墟）、（白潮）などで発表された

金東仁の（答刑）（甘藷）があり、玄鎮健の（運のよい日）、羅稻香の（桑の葉）がある。

抵抗期の文学として

「朝鮮プロレタリア芸術同盟（略称カッパ）」が組織されたのは同人誌（焰群社）と（パスキュラ）の合同によつて一九二五年成立し、一九三五年相次ぐ弾圧によつて解散されたが朝鮮文学が最も華かにその存在を問われたのはこの時期の作品群だったと思う。

この期の作品としては

李箕永の（民村）趙明熙の（洛東江）崔曙海の（白琴）韓雪野の（泥濘）女流作家として姜敬愛の（地下村）朴花城の（早鬼）があり、同伴作家として俞鎮午の（金講師と丁教授）（滄浪亭の記）がある。

文学の開花期として以下下巻に収められ、（カッパ）解散後の作品が主で、その形式の多様性において最も高い水準を示したのはこの時期に開花した文学であった。

李孝石の（そはの花咲く頃）、金裕貞の（椿の花）、（春・春）李箱の（翼）金南天の（少年行）朴泰遠の（五月の薫風）金史良の（留

置場で会った男）李泰俊の（狩り）金東里の（巫女図）許俊の（習作室にて）

これらの作家とその作品は日本の植民地時代を生きた朝鮮人であれば誰しも一度は通つたり見たたりしたことのある原風景を最も濃やかな民族的抒情でその琴線を鳴らしている。すなわちこれらの作品は朝鮮知識人の精神的通過儀礼でもあったと言つてよいだろう。

では彼らが描いた世界はどんな世界だったか？

遅れた朝鮮の近代化は文芸史上にも当然投影し、ロマン主義、写実主義、自然主義、唯物史観的リアリズム、ダダイズムまで含めて殆んど同時に入つて来たため、その時代の作品を判然と文芸史的に分類するのは困難である。だがその描かれる世界はいかなる芸術的方法であるにせよ「植民地朝鮮」であることには間違いない。出口のない当時の暗い植民地朝鮮の現実をあらゆる芸術は避けて通れなかったのである。即ち日本の植民地政策もたらした人間の極限状況におけるあらゆる不条理が口を求めて身悶えする——その身悶えする声が文学共通の主題だった。

私は最近ある日本の女性朝鮮引揚げ作家M

日本帝国主義侵略により日本の植民地となり、以後朝鮮の近代化は三十六年間日本の植民地機構の枠内において進行することとなり、その制約が「自主的な近代的自我」を前提とすべき文学の発展に与えた影響は大きい。

朝鮮文学の近代化はまず一九一九年の三一独立運動から始まる。大まかに言つて近代文学の使命が現実世界の具体的反映を最高目的とするならば、日本統治に反対して朝鮮全土に拡げられた政治的抵抗とともに新しい朝鮮文学が発したことは必然のコースであり、象徴的だった。それ故朝鮮の近代文学の夜明けは三一運動で始まる。

私はここにそれらの作品内容にまで触れる余裕はないが、その作品がどういう風土と土壌でいかなる過程で創られたかその座標軸だけは正確にみておく必要があると思う。

この選集ではその採られた作品を説明の便宜上、一九一九年より一九二〇年の前半までを文学の目覚めの期とし、一九二〇年の後半より一九三〇年前半までを抵抗文学の時期とし、一九三〇年後半以後を文学の開花期と三区分したのはその内容に即して概ね妥当な分類であったと思う。

の「慶州はわが母の呼び声——わが原郷」なる作品を読み、同じ現実に対面してもその作家の置かれた位相の違いにより作品が捉える（対象）はかくも遠く隔たるものかと新しい事実を発見した。もし読者はこの文庫に載っている同じ女流作家で、同じ時代の朝鮮の現実を描いた姜敬愛の（地下村）を読み比べていただければその（真実）はいかに遠く、空虚で、その題名すら疑いたくなるような違和感を覚えるのは私の単なる偏見でないことが解るだろう。

私はここに「遙かなる国」日本国を見る。三十六年の日本軍国主義的朝鮮統治は地理的には最も近い朝鮮を世界の最も遠い国へ追いやった。

いま朝鮮人で誰でもが民族的に最も大きな関心事は、イデオロギーの左右を問わず国が三十八度線以南と北に分断されていることである。

日本が第二次大戦で敗北した時、朝鮮は当然カイロ宣言で新たな独立国家として出発することを予定されていた。だが米・ソ両国の軍隊は朝鮮における日本軍の武装解除を行う目的で三十八度線以南の朝鮮の南と北とを占領し

それぞれ別の政権を樹立したことは周知の通りである。

今年は第二次大戦後三十九年、朝鮮戦争勃発三十四年になる。そして朝鮮を分断した米ソの政策はまだ死んでいないし、韓国が米国のいう民主主義国家の安全保障戦略の将棋のコマへと転落したことも読者の知られる通りである。そして日本が米国の政策に公然とコミットしていることは、もはや誰も何の疑いも持たぬ。つまり朝鮮人はまた復活した日本帝国主義の亡霊に悩まされているのである。

それは杞憂であろうか？ 侵略を（進出）とし、独立運動のデモを（暴動）と教える隠蔽と偽装の三十六年の歴史を「朝鮮短篇小説選」二巻は杞憂でない事実を最も具体的に証していないか。

国家という名の下で行われる加害行為は、個人としては忘れられようが、被害者であってみれば、忘れることのできない具体的傷跡をこころか肉体に残してゆく。その傷痕はその人間が生きる限り疼くであろう。

毎年八月になると「ノーマ・ヒロシマ」「ノーマ・ナガサキ」のスローガンをよく眼にするが、「ノーマ・ナンキン」「ノーマ・ケイジョウ」はあまり見たことも聴い

たこともない。一人の人間として、自らの十字架を負うことと、自らの受けた被害を意識することを比べて、そのどちらが尊いことか、ここで決められることではないが、この半世紀前の古典がいまも鮮明に何かを語っているように想い出す。

「わしの足をもぎとった奴も、おまえさん
をそんな片輪にしたやつも、いったい
誰だか分かるかい？ おまえさん」
男のこんな言葉はチルソンの骨のずいまで
しびらせ、わけも分らず運命を怨んで
いた暗闇の中に何かきらりと光りを投げ
こんでくれたかにみえた。

これは八四年のいま朝鮮半島のどこかで語られていた風景でなく、五十年前姜敬愛の「地下村」に描かれている現実の断片である。
われわれは（かすんだ遠い風景）の原景を
探さねばならぬ。自分たち現在の位相を確めるために。隠蔽と詐術で歴史を演出する政治の虚しさから離れて、自分たち自身の鮮明な
焦点（真実）で新しい朝・日関係の枠を捉える時ではないか。

最近「日韓新時代」の幕は切って落されたと、ジャーナリズムは連日騒ぎ立てている。がその「日韓新時代」の内容とは何だろうか？ 観客は誰もいない舞台に登場する二人の人物——一人は海の彼方光州で二千余名の同族を虐殺し、血塗られたその手で政権を篡奪し、「第五共和国」として非なる偽りの政府を樹立した独裁者であり、もう一人は「ヒロヒト」という名のもとに二百万の朝鮮人を奴隷狩りして強制連行し、名を奪い、ことばを奪ってしまにその後遺症を在日朝鮮人に遺している事実を、全面を塗りつぶして書きたてるジャーナリズムは唯の一行も触れなかった。

この二人によって演ぜられる舞台がいかにかに古傷を匿そうと、我々民衆とは関わりない人間不在の「狼芝居」に過ぎないことをはつきり知ろう。

朝鮮と日本とはいまだに「近くて遠い国」であろうか？

焦点距離が近すぎると被写体の像はぼける。その意味で半世紀まえのこの（原景）は貴重な発見であり、「コスモス」の同人諸兄にも一読を薦めたい好著であると思う。

パパイヤのある村で

緒方宗平

石だたみの

狭い広東の街をとおり

中山大学の下をとおり

パパイヤのある村に

部隊は駐屯した。

パパイヤは実っていないなかったが

甘い匂いが漂っていた。

纏足はみかけず

女は

裸足で稲をかついだ。

病死した若い兵は

死にきわに

遠く海山をはなれて

母をよんだ
おかあーさん。

残暑のきびしい日曜日

畳のうえにねころんでいると

消えているような

人間のこえがきこえてきた。

おかあーさん。

石塔

丘のうへの公園に

さかりのつつじが咲き

蓮の台の

おしゃかさまよろしく

つつじにかこまれた石塔。

観光の人たちは見あげて

カメラを向けた。

1984. 9. 2

紀元二、六〇〇年を祝し

その記念に建立されたという。

それはまた

日中戦争のさなかでもあった。

戦地からかえってそれを見た。

南京植の木かげの

木目をつけたコンクリートのベンチに

腰をおろすと

真向いに石塔があった。

沖繩にいて

ひめゆりの塔をみると

涙がでてしうがなかったと

その女はいったが

石塔をまえにして

戦争のかげりをどこまで受けとめるだろう。

空は五月にはれ

まぶしい日射を浴びて

屹立する石塔。

1984. 5. 12

日雇い元次と「しのぎ」

高島 洋

元次が仕事にあふれドヤで臥っていると

仲間のKがやってきて

かれに耳打ちした

元次がうなづき、Kと連れ立って外に出ると

別の二人が待っていた

四人は暮れかかる商店街を通過して

公園のなかにはいっていった

しばらく歩いて

植込みのなかに

日雇いらしい一人の寝込んでいるのを見つけ

Kが近づくと足で蹴った

二人がつづいて殴打した

元次も一撃すると

おとこはあとずさりしながら

所持金を地上におき

素早く暗がりのなかに消えていった

元次はついに「しのぎ」をやってしまった

四人が夕食をするといくらも残らなかった

* * *

それから元次は二ヶ月程仕事にありついて

またあぶれた

就労証明をもって福祉センターに行き

五万円余りの失業手当をもらった

かえりに

ホルモン屋の前でちょっとためらったが

モツ焼のにおい、煙りの立ちこめる店内に入って

いった

アワモリを四杯あけると

空腹にしみわたり

みるみる酔いがまわって

公園にふらふら入り込むと倒れるように寝入って

しまった

とつぜん頭部を蹴られ目覚めると

五人の見知らぬ男たちに囲まれていた

こんどは元次が

殴られ、蹴られ、あげく財布ごとあっさり奪われた

五人のなかの一人の顔に見覚えがあったが

どうしてもおもいだせなかった

* * *

元次はしばらく茫然としていた

大よその危険を察知していながら

畏にはまりこんでいった愚かさを悔やんだ

そして弱者を狙い撃つやり方に

元次は抵抗を感じはじめていた

ふと空腹を覚えて

いまごろ仲間のKはどうしているだろうとおもっ

たりした

手をついて立上ろうとすると体が痛い

やがて街のネオンの方に向って

かれはゆっくりあるきはじめていた

紫陽花の頃

本田 晴光

紫陽花の花が咲き 梅雨にはいったが
空梅雨で 雨が降らず
花の色もうすく 冴えなかった
オークハイツの 二階住いの女は
目があかるく 足どり軽く降りていったが
こしはらく 音沙汰もない
郵便受けに差しこまれた 掛取状が
うらめしそうに 首を突っこんでいた
もう 誰もいなかった
女は 故郷に帰ったのだ
と 話してくれた女も
尻きれとんばになって 消え失せた
赤い夕日の とどく町は
呆けたぶざまなかたちで 風に揺れ

くたびれた一日が 空鐘を鳴らした
所詮は 女心のあわれさよ
などと 舌切雀になった老婆たちが
鎮守の森で 浮世の波をたてていた
時折 湿った裏話しのきこえる路地
曲った腰をゆすり 嘆息をつき
今年はえろう暑うてかなわん！
と つぶやき独り言を残しながら
手提袋をさげた 老婆の
パチンコ店へ急ぐ サングル姿
鋭い目つきが きっと引き締まり
右親指にできた はじきだこ
さっと開く チューリップに向けて
つぎから つぎから
はじき出されていく パチンコ玉より
ひと足はやく すばやい目が追う
追いうちをかけながら
これでもか これでもか と

執念の声が うなりをあげてきこえる

わしらも 追われて 追いつめられ
追いたてられながら 食いつめてきた人生や
これで ええんや
息子わなあ 軍艦マーチに送られて
日の丸の旗 いっぱい振られて
撃チテシ止マム なんてかっこいいときかされ
ながら

ひっぱっていかれたんや
あれから 四十年もたつというのに
まあだ 帰って来ん
いつまでたっても 軍艦マーチやなんて
バカも ほどほどにしとけや
今度こそは こんなだましの手にのらんで
あの だんまりやのスケベエヤロウ
殺し屋の たぬきめがけて
わしゃ 仇討ちしてるんや
このパチンコ玉で

撃って 撃って 撃ちまくって
息子の無念を 晴らしてやるんや
あの雁首 撃ち落してやるで

飛べない鳥

山野 千エ

目が覚めると鴉の声が聞こえるのか
鴉の声で目が覚めるのか。
夜明けの空に向かって
鳴いている鴉の声は
いつも同じ場所から聞こえてくる。

「鳥シリーズ」と呼ばれる程
鳥の絵を沢山描いた画家の鳥は
みんな飛べない鳥である。

さまざまな姿に捕らえられて

身動き出来なくなった鳥たちは

画面の中から画家に

どんなことを語りかけていたのだろうか。

今朝も鴉が鳴いている。

飛ぶことを忘れたように

疳高い声で鳴き続けている

あの声を聞いていると

仲間を呼んでいるだけでは

ないような気がしてくる。

坂道

近藤 計三

昼さがりの坂道を

正方形の舗道の敷石を数えのぼる。

地面に刻まれた年輪みたい。

通り越す傍道の辻角には

吹き溜った落葉がくろずんでいる。

まだ行く手は陽にしろく光っている。

楓の並木が両側で色づいている。

もう風にあふられて紅いのやら黄ばんだのが

からから転がってくる。

（ただ、一さいは過ぎて行きます）

ちらっと大宰治の『人間失格』の言葉が掠め

俺は一呼吸ついて

靴で葉っぱを踏んづけていく。

脆い骨みたいに碎けるのもある。

これは老化現象なのか

あるいは転成への脱皮というやつか

俺は禅坊主の謎ときめいた想いにふけっていると

ふいにピストルの号砲が響いた。

びっくり見上げるといま運動会の幼稚園児が

一斉に湧いた甲高い声援のなかを

狭いグラウンドに沿って疾っていた。